The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治・昭和軍歌にみる近代的特徴 : 楽曲・テーマ・言語表現を中心に
Author(s)	李, 有姫
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61833
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　李 有 姫　）	
論文題名	明治・昭和軍歌にみる近代的特徴 －楽曲・テーマ・言語表現を中心に－

論文内容の要旨

本稿で扱う軍歌は、開国と共に日本へ洋楽が本格的に流入して以降に、初めて作られた歌である。軍隊で兵士の士気鼓舞のために作られた歌で、広義には軍楽や一部の唱歌、戦時(軍国)歌謡までを含めて軍歌とする。歌詞の形式は、新体詩を採り入れ、音楽形式は唱歌と同一で、主として2/4拍子やヨナ抜き長音階、行進曲風の「和洋折衷」という特徴をもつ。軍歌の起源としては、「久米歌」と『万葉集』(防人の歌)などが挙げられ、言語(語彙)は『古事記』や『日本書紀』(以下、『記紀』とする)に、思想は「神国・皇国(皇統)・尊皇思想」(神武創業の理念)を起源とするものがほとんどである。明治軍歌は、外山正一の日本初の新体詩「抜刀隊の詩」が1885年に軍歌に転用されることにより誕生した。これを機に、詩人・歌人・軍人などによる多くの軍歌が制作され、日清戦争・日露戦争期の第1次ブームを経て、昭和長期戦争期には第2次ブームを迎えるようになる。

本研究は、明治時代の軍歌80曲（以下、明治軍歌とする）と、昭和時代の軍歌140曲（以下、昭和軍歌とする）を対象に、その楽曲及びテーマ、言語表現(メタファー・語彙)に関する近代的特徴を明確化し、かつその特徴の背景及び流行の要因を明らかにすることを目的としている。より具体的には、これまで必ずしも明らかにされてこなかった軍歌に使用されている語彙から世界観・思想を抽出すること、西洋戦争詩・新体詩・軍歌という三者間の比較をし、その相同点と相違点を明らかにすること、和歌と軍歌間の比較を行い、その特徴をより明確にすることである。こうした作業に加え、昭和の戦時期の前後間における言語的影響の有無とその実態についても一部、考察を行った。以下、本研究の結果をまとめる。

1. 明治・昭和軍歌にみる楽曲・主題・言語表現の近代的特徴

(1)明治軍歌40曲と昭和軍歌50曲について分析を行った結果、明治軍歌には、①長調(C・G調)」、②ヨナ抜き長音階、③2/4拍子、④速いテンポ、⑤行進曲風、⑥ピョンコリズム、⑦4フレーズ形式、⑧7・5調、⑨9度(音域)、⑩完全小節、などが多くの曲に用いられていたことがわかった。このような「和洋折衷」の日本的音楽は、文部省の「音楽取調掛」の設置(1879年)以来、伊沢修二らを中心に作られたものである。軍歌においては、1891年「敵は幾万」の発表と人気をきっかけに、「和洋折衷」モデルが標準化され、このスタイルが、多くの歌に用いられ、定着した。歌詞は、和歌の5・7調や歌謡形式を継承した新体詩の7・5調が用いられているが、この新体詩は、外山正一・井上哲次

郎・矢田部良吉らによって作られたもので、この形式は以後、昭和軍歌に至るまで受け継がれた。

昭和軍歌においては、①長調(C・G調)、②ヨナ抜き長音階、③2/4拍子、④速いテンポ、⑤行進曲風、⑥脱ピョンコ(フリースタイル)リズム、⑦4フレーズ形式、⑧7・5調、⑨10度(音域)、⑩完全小節、などの技法が多くの曲で用いられていることがわかった。明治軍歌との相違点としては、流行歌（モダン歌謡）の流行や影響によって、ピョンコリズムよりは「脱ピョンコ(フリースタイル)リズム」が、音域においては「10度」(明治軍歌は「9度」）が一般的に用いられたことが挙げられる。

さらには、「反転形リズム」が登場したり、「ヨナ抜き短音階」や「4/4拍子」、「中位テンポ・遅いテンポ」、「歌謡曲風」、「不完全小節」、「12度以上の音域」といった曲が増加したことがわかる。曲調は、日清・日露戦争の戦勝意識を反映した軽快な曲と比べると、昭和軍歌にも明るく好戦的な楽曲が多用されてはいるものの、モデラートやスローテンポのヨナ抜き短音階及び歌謡的技法を用いた曲の割合が増加(約20%)した。これは、長期戦争による戦没者の急増という暗鬱な時代的背景と、センチメンタルな国民感情、哀愁感を醸し出す大衆歌謡の流行の他、哀調の歌詞-短音階-テンポ-リズムの調和を考慮した作曲家達の嗜好などが反映された結果として推察される。

(2)明治軍歌80曲と昭和軍歌120曲のテーマを調査分析したところ、明治軍歌の場合、上位10%かつ4位以内にランクインしているものは、①戦意昂揚(忠君愛国・進軍・征服)、②兵士称賛・武勇談(英雄美談)、③戦勝記念・凱旋歌、④詠史歌であった。明治期には、軍歌の典型的な様相として、兵士の士気鼓舞や戦勝意識の鼓吹を目論んだ歌が最も多く発表された。また、日清・日露戦争を契機として、戦没者や軍神、そして歴史的な人物の戦死を賛美したり、英雄や美談が多く語られたりするという社会風潮が遍満していたが、このような社会相を反映した結果であろう。

一方、昭和期においては、①戦意昂揚(忠君愛国・進軍・征服の軍国主義)、②国民(国民生活・国民キャンペーン、国民総力・総意、国民精神昂揚運動)、③女性(母、花嫁、婦人、一般女性、従軍看護婦)、④政治(政策)・体制、という順となっている。明治期と同様に、戦意昂揚的な歌も多いが、その性格は昭和政府の軍国イデオロギーを標榜したものであろう。また、明治期のテーマの対象が兵士と従軍看護婦に限られているのに対し、昭和期には、兵士から女性、青少年、学徒、子供及び国民全体まで拡大し、女性も従軍看護婦から母、婦人、花嫁、一般女性に至るまで広くテーマの対象となっている点も大きく異なる点である。これは、軍歌をプロパガンダとして活用した昭和政府の統制や従軍の義務が国民全体に反映された、いわゆる国家総動員法の影響によるものであると思われる。

(3)言語表現(メタファー・語彙)においては、明治80曲・昭和140曲を対象に、全16項目・計522種のメタファー・語彙について調査分析した。分析の結果、最も多種多様なメタファー・語彙は、昭和期における「死」と「兵士」に関するもので、その種類はそれぞれ42種と39種に及ぶこと(付録2参照)、そして、明治期には「兵士の思想・精神」をたとえる表現が159曲・約22%(計712曲/重複曲込み)と最も頻出するのに対し(付録1参照)、昭和期になると、「生命・死・転生(分身)」が表現されている歌が149曲・約18%(計853曲/重複曲込み)で最も多用されたことがわかった(付録2参照)。さ

らに、昭和期には、「地政学地点・戦争目標」を現す語彙の出現が111曲・13%と、全体の3位にランクインしていることもわかった。こうした結果は、長期戦争を背景に、全世界の共栄・統一を唱道するアジア主義の拡大による究極的な政治的目標・構想が軍歌にも反映されたものと推察できる。これに加え、「兵士」、「日本(国体)」、「天皇」、「国民」、「戦争」、「女性」、「兵士の精神・思想」、「生命・死・転生(分身)」を表すメタファー・語彙は、主として古語(特に和歌でよく使用された言葉)から採り入れられたものであることも明らかになった。昭和期の「青少年」、「学徒」、「子供」、「女性」、「国民」、「地政学地点・戦争目標」、「政治体制・組織」などを表す語彙は、主として戦争や戦時動員法、政治的(イデオロギー)要因などによって登場したものであると言えよう(付録2参照)。

その他の特徴として挙げられるのは、昭和期では、国民の結集・統制や戦争への動員を目論んだ民族的「集団主義」を強調する語として、「祖国」、「国民」、「同胞」、「(銃後の)一億」などの語も多用されていたという点である。「勇士」、「モグラ」、「Z旗」、「決戦」、「若鷲」なども流行していたが、これらは、決戦を控え死の覚悟を問う、いわば「死の代理言語コード」として役割を果たしたものと思われる。

注目すべきは、明治期には登場人物が兵士や従軍看護婦に限定されていたのに対し、昭和期には「女性」、「青少年」、「学徒」、「子供」を比喩する多様なメタファー・語彙が用いられたことである。女性は、「大和女郎花・白百合・桜・菊・椿」、青少年・学徒は、「若鷲」と「若桜」、子供は「小国民」にたとえられている。これらは全て天皇(国家)のための「忠義」と「犠牲」のカモフラージュであり、審美的イデオロギー(aesthetic ideology)の装置として用いられたと考えられる。

2.明治・昭和軍歌の言語的特徴から示唆される世界観

軍歌の源流である和歌と比較して世界観を整理した結果、(1)和歌での「命」の観念は、必ずしも「死」を前提として命を取り扱っていないことや、生きものとして実存に重点をおいた「現世主義的世界観」によるものであることがわかった。 明治軍歌における兵士の命(生命)は、現実における忠義や愛国心、戦争での天皇(国家)のための美しい死を奨励することを意図して描かれており、その死は、転生や来世の文脈では描かれていないところから、明治軍歌でも「現世主義的世界観」が支配的であると言える。明治軍歌に「忠義、名誉、功勲、勇、大和魂」など、兵士の精神・思想に関するメタファー・語彙が最も多用されていることと、「儒教思想に淵源をもつ近代以前に求められた武士精神・道徳」が発現していることからもこのような世界観が読み取れる。

(2)昭和期には、明治軍歌にみられる「現世主義的世界観」と共に、「仏教的な来世主義的世界観」が表出されていることがわかった。メタファー・語彙においては、「死」を見立てる審美的装置として、和歌的手法である「桜・若桜」、「散る」、「玉に(と)砕ける」、「肉弾と砕ける(散る)」

などが頻出していることがみられる。「生命」の代表的な象徴である「桜(仇桜)」は、生の美しさや、散ることへの哀惜、それに日本的な純粋美をそこに含むが、軍歌では「忠義」や「死」などを美化、もしくは転化するための表現として「桜～散る」の縁語形式として多用されているのである。昭和期の「桜」は、主に靖国神社で原初的に美しい「生命」＝「分身」として咲き返る「転生」の表象として描かれているところから、昭和軍歌では「仏教的な来世主義的世界観」も濃厚にあらわれていることがわかる。

3.明治・昭和軍歌の言語的特徴の背景及び要因

最後に、明治・昭和の言語的表現の特徴(和歌的要素、兵士の思想・精神、生命・死・転生(分身)など)がどのような背景・要因により出現するようになった理由として、(1)軍歌の深層構造・政治思想(支配イデオロギー)的背景として、「神武創業への回帰」＝「神国・皇国(皇統)・尊皇思想」が挙げられること、(2)君・武士(もののふ)間の二項対立(binary opposition)の関係構造と「忠君(死)の道徳観」(古代)→外山正一らの知識人による「近代以前に求められた武士精神・道徳」(＝「日本型ナショナリズム」「愛国心」)の要求(明治)→昭和政府の「日本民族(国民)の精神」(＝「近代武士道精神」「玉砕精神」)の要求が考えられる。おそらくこのような経緯から昭和長期戦争期に至っては、「死」に関する「高度の精密な言語コード」が42種へと発展・増加したのであろう。献身(愛国心)の実践と義務・責任を問う「小国民」、「学徒空(兵)」、「若桜」、「若鷲」、「少年兵」、「銃後の母」などの表現の登場は、昭和軍国時代の日本国民の精神＝一億玉砕の影響を反映していると言える。こうした要因に加え、(3)和洋折衷の新体詩を創成した外山・井上・矢田部ら(ナショナリスト)の知識人階層の思考や意識が支配的であったという点、(4)軍歌の中心には和歌とその文化が継承されていること、(5)さらには軍歌がトップダウン文化(支配層主導文化)であったという点にも要因があると思われる。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　李　有姫　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　准教授	岩井　茂樹
	副 査　教授	加藤　均
	副 査　准教授	佐野　方郁
	副 査　教授	五之治昌比呂
	副 査　准教授	柴田　芳成

論文審査の結果の要旨

明治以降のいわゆる日本の「近代音楽」の礎は、軍歌によって作られたといっても過言ではない。それは、西洋音楽の取り込みに始まり、さまざまな変容過程を経て、唱歌や校歌、さらには流行歌にも大きな影響を与えるものであった。その数は膨大で、１万曲以上作られたのではないかという説もある。

提出された論文「明治・昭和軍歌にみる近代的特徴－楽曲・テーマ・言語表現を中心に－」は歌詞と楽譜の両方が残っている軍歌を対象に、明治期から昭和期の間に起こった変化と、その背景を明らかにしようとする研究である。論文の構成と内容を以下に述べる。

第一章「国内外の構造的環境及び明治軍歌の形成」では、開国以後の国内外の社会環境の変化などを述べた後、明治軍歌の形成過程について明らかにする。とくに歌詞の面で1882（明治15）年に発表された『新体詩抄』が軍歌形成に大きな影響を与えたこと、外山正一や佐佐木信綱、中村秋香、永井健子など、新時代に適した詩や和歌を作ろうと模索した人たちが中心となって明治軍歌が形成されたことを指摘する。

続く第二章「新体詩と明治軍歌」では、第一章で指摘された新体詩の影響について、具体的な曲を取り上げて証明している。新体詩の軍歌への影響自体は先行研究でも縷々指摘されてきたことであるが、具体的にどのような曲にどのような形で取り入れられたのかという詳細な分析は皆無に等しかった。本章における分析によって、先行研究の不足点が補足され、具体化される。

第三章「明治軍歌の種類と特徴」では、明治軍歌の音楽的特徴や主題、さらには使用語彙のメタファーなどを三期に分けて詳細に検討する。この内、主題に関しては、初期（日清戦争まで）は単なる軍人のための行進曲だったものが、中期（日清～日露戦争期）になると戦意高揚を目的としたものや、戦場の状況を描写する曲が登場し、後期（日露戦争以後）には多分に叙情的な軍歌も現れたという。

第四章「昭和時代のメディア産業の発展と軍歌の大流行」では、明治以後に現れた新しいメディア、具体的にはレコードや蓄音機、そしてラジオといったメディアが軍歌に及ぼした影響について論じる。昭和期になると、旧来からあった新聞・出版社に加え、新しいメディア産業の力が大きくなり、これら新旧のメディア産業がこぞって軍歌を募集したり、発売したりすることによって、利益をあげようとしていた様相が示される。軍歌が単に軍事利用目的に作られた音楽ではなかったことが本章で明示される。

第五章「昭和軍歌の種類と特徴」は、昭和軍歌を対象に音楽的特徴と主題、語彙のメタファーを分析している。この内、主題に関しては、初期（日中戦争勃発以前）には英雄美談、とくに無名に近い兵士を称揚する軍歌が多く見られ、好まれたようだが、後期（日中戦争勃発以後）になると次第に母や子どもなど身近な人々が軍歌の中に登場し、家族を守るために戦うというそれ以前には見られなかったテーマが現れるようになるという。

第六章「明治軍歌と昭和軍歌の比較」では、より詳細で客観的な比較を行うため、統計的手法を用いて両時代の軍歌を比較する。本章では、調（Key）、音階、拍子など10項目にわたる音楽的特徴と、

人物など計16項目にわたる言語的特徴が比較によって明示される。音楽的には音域が広がり、調が上がったこと、言語的には個人から集団、兵士から家族へといった主題の時代的変化がより明確に示される。

終章では、第六章までの総括が行われ、今後の課題が述べられる。ここでは戦後音楽への連続性と不連続性などの解明などが今後の課題とされている。

軍歌は軍国主義的イデオロギーの注入装置としての側面のみが強調されることや、それに起因する偏見などから、軍歌研究自体が忌避される傾向にある。そのため、これまで音楽研究において具体的な解析や考察が行われてこなかった。また明治期、あるいは昭和期だけを対象にした論考は存在するものの、明治期から昭和期への変化に注目する論考は皆無であった。

本論文はこうした先行研究の不備を補い、新たな知見をもたらすものである。膨大なデータ分析を通じて、各時代の軍歌の特徴を再考しながら新たな指摘を付与した点、軍歌が大量に作られた明治と昭和という両時代を比較することによってはじめて見える変化が明示された点は高く評価されるべきだろう。

ただし残念なことに、データ解析と分類、比較といった作業に注力し、時間を費やし過ぎたためか、分析で得られた特徴に関する考察がおろそかになっているところがある。この点は今後補う必要があるだろう。とは言うものの、こうした不足点は論文そのものの学術的価値を大きく損なうものではないと判断する。

以上、審査したところにより、本審査委員会は、全員一致で本論文が博士の学位（日本語・日本文化）にふさわしいものであるという結論に至った。